

濁水かわら版 臨時号

臨時第 81 号 2019 年 4 月 2 日

ボケ防止を兼ねて 中安 宏規

新元号

「令和」の歴心を読む

歴心は今回、新元号決定にあたり歴史上の心の動きをたどるために考えた造語です。果たしてとらえることが出来たか？

出典は万葉集

安倍首相は4月1日、同30日の天皇陛下退位と5月1日の皇太子殿下の即位に伴う新元号を「令和」と発表しました。出典は1300年ほど前の最古の歌集「万葉集」で、「初春の令月にして気淑く風和ぎ」から令と和を合わせた語と説明した。中継するテレビは一斉に「初の日本古典からの元号」と高揚しながら伝えていた。

① 図Aは、出典の万葉集(巻第5-814)の「梅花の歌32首」の序文である。校注を参考にしながら読むと、

西暦730年正月13日、大宰府の帥(長官)大伴旅人は、屋敷に近隣の役人や部下など(31人)を招き宴会を開いた。正月は令月(よい月)で気持ちは心地よく、風は和らいている。梅は鏡の前の白粉のように白く咲いている…ここに天を屋根とし、地を座席とし、膝を交えて觴を飛ばす(飲みほす)…淡然(淡々)として皆、快然(気分よく)している。庭の梅に賦して(ちなみ)短詠(短歌)を1首ずつ詠んだ。当時筑前守だった山上憶良は一春さればまづ咲く宿の梅花 独り見つつや春日暮らさむと詠み、宴を主宰した旅人の歌は—

わが園に梅の花散るひさかたの雨より雪の流れ来るかも庭の梅の花が散っている。いやいやこれは、大空から雪が流れてくるのであろう。

旅人や憶良らの大宰府は「筑紫歌壇」として名高い。

曲水の宴の誕生

② 中国東晋時代の永和9(353)年3月3日、浙江省の蘭亭に名士41人が集まり、曲水の宴が開かれた。曲水は庭園内を流れる小川。その流れに觴を流し詩歌を詠む交流会だ。その序文「蘭亭序」を書聖と言われる王羲之が書いとされるが、真蹟は残っていない。

図Bは後の書家が書いた「蘭亭序」である。旅人が開いた「梅花の歌32首」の序文は、古くから蘭亭序の影響を受けていると言われる。図Bの□で囲った部分を自己流に読下すと、「さて宴は流觴の曲水に移り、皆そこに列座。糸竹管弦が盛んで無いと雖も一觴一詠は、幽情(奥深い思い)を暢叙(充分に述べる)に足る。この日は天朗らかに気清み恵風和らぎ伸び伸びとした」

③ 図A③の「淡然に自ら放しきままにし…」も、→次頁へ

図A

梅花の歌三十二首 序を并せたり
天平二年正月十三日に、帥の老の宅に萃まりて、宴會を申きき。
時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁歸る。ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放しきままにし、快然に自ら足る。若し翰苑あらぬときとは、何を以ちてか情を攄べむ。請ふ落梅の篇を紀さむ。古と今とそれ何そ異ならむ。園の梅を賦して聊かに短詠を成す宜し。

出典:岩波書店 日本文学大系⑤「万葉集II」より

図B

永和九年歲在癸丑暮春之初會
于會稽山陰之蘭亭脩禊事
也羣賢畢至少長咸集此地
有峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水
列坐其次雖無絲竹管絃之盛
一觴一詠亦足以暢叙幽情
是日也天朗氣清惠風和暢仰
觀宇宙之大俯察品類之盛

出典:雄山閣 飯島太千雄編「王羲之名品字帖 3 卷 蘭亭叙集」より。

広まった曲水の宴 & 梅から桜への変化

原産地中国・加工地日本

前頁から) 蘭亭序の「快然自足(健康を考え)、老いのまさに至らんとする事を知らず」の引用と、岩波版「万葉集」校注は指摘している。

新聞報道によると、安倍首相は「国書にこだわっていた」そうだ。日頃の言動から考えれば想定内だが、安倍商会の商品としては「原産国中国・加工地日本」の2流品であろう。生前譲位は、崩御譲位のような暗さがなく、今後も継承すべきだ。



1 4版 2019年(平成31年)4月2日(火)

毎 日 新

えいこう きゅうか こうし ばんな ばんぼう
他の5案 英弘 久化 広至 万和 万保

④ 日本での曲水の宴は、日本書紀の^{けんそう}顕宗天皇元(485)年3月3日の条に記事が見え、同3年まで開催。次いで聖武天皇は、^{じんぎ}神亀5(728)年に文人を招き曲水の宴を開いた(続日本紀)。その2年後、旅人が「梅見の宴」を開いている。彼が大宰府へ赴いたのは720年。^{はやと}隼人征伐の将軍として出征し、任務を果たし太宰府長官を務める。梅見の宴を開いた30年末に帰京が叶い、翌31年67歳で旅立っている。

梅から桜への変化

旅人の子家持(?-785年)は、越中守時代の天平勝宝2(750)年3月3日、曲水の宴を開き歌が万葉集(巻19-4151-53)に載る。その初歌は—
 今日^{けふ}の為と思ひて標めしあしひきの^{かみ}峰の上の桜かく咲きにけり

曲水の宴の行事の重さと同時に、桜を題材にしている。また最大の歴史地震と伝わる貞観11(865)年の地震で壊滅した多賀城址からは、曲水の遺構が発掘された。都から遠地に派遣された高級官僚の望郷の慰みの宴であったようにも思われる。

④ 大伴旅人は梅を題材にし、その20年後の家持は桜を題材に選んでいる。正月と3月の違いはあるが、この時代の日本は梅から桜への移行期であったようだ。万葉集と古今集の題材数を比べてみよう。

	梅	桜	時代	特徴
万葉集	118	44	奈良朝	759年迄 4500余首
古今集	29	53	平安朝 794~ 1156年	905年醍醐天皇の命で908~13年に成立。 約1100首

出典:小学館「大系日本の歴史」③

中国の律令制を手本に国造りを急いだ天平人は、漢詩に読まれた梅に惹かれたようだ。梅は中国原産

で mei である。輸入された時、上に u をつけウメになったと漢和辞典に見える。国家体制が確立した平安初期には、人々の心は、日本の代表的な桜への思いを深めたのではなからうか。桜のサは五月や早乙女サと同じで、田植えの穀霊^{こくれい}を示唆し、クラは穀霊の宿る坐を意味すると言われ、桜は国花の座を占めた。江戸時代には大和心が台頭したが古今集には在原業平^{ありわらのなりひら}が登場する。

世の中は絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし

だが梅から桜への移行は激変であった。内裏南殿の前に植えられていた梅と橘のうち梅が桜に植え替えられ、左近の桜・右近の橘になる。その時期は845~74年の間という。(大系日本の歴史③)

御所 神泉苑の一般開放

863(貞観5)年5月20日、御所の神泉苑に6つの霊座^{りょうざ}が設けられ、花果が盛られて貴族らが供養した。不慮の死を遂げた6名の霊を慰め疫病の流行を食い止めようと穢れ^{けが}を海に流す催しだ。一般庶民にも開放された。時の天皇は清和天皇。即位から外戚の藤原良房による摂政政治が行われた。宮廷の衰えから摂関政治の始まりだ。

同天皇は9歳で即位し、27歳で9歳の皇太子(第1皇子)に譲位した。在位18年間の疫病流行10件(富士川游「日本疾病史」、被害地震は多賀城が壊滅した貞観地震を含め5件(震災予防調査会「大日本地震資料」)の計15件。それに加え、17歳の時に大天門が放火で炎上した。不運な天皇だったようで伊勢神宮に使者を送り、護持を祈った。譲位後は仏門で激しい修行の末に31歳で他界した。